

孤独死 しまいい込む

部屋に散乱 生きて証し

亡くなった人の家を身内に代わって清掃し、遺品を片付ける「遺品整理業」という仕事がある。一人暮らしの世帯が最も多く、孤独死も後を絶たない今どきのニッポン。そんな現代に横たわる「死の風景」を、業者とともに見た。

(田原徳容)

遺品整理を終えた50歳代男性の部屋。依頼主の親族が回収を求めた財布やアルバムなどは、段ボール箱1箱(手前)に収められた(6月下旬)

ルポ 2011 遺品整理

玄関を開けた瞬間、強烈な臭いが鼻を突いた。6月下旬、近畿中部のマンションの1室。その3日前に中で見つかった住人の50歳代男性の遺体は、死後3週間が過ぎ、完全に腐敗している。

玄関を開けた瞬間、強烈な臭いが鼻を突いた。6月下旬、近畿中部のマンションの1室。その3日前に中で見つかった住人の50歳代男性の遺体は、死後3週間が過ぎ、完全に腐敗している。親類から遺品整理を依頼された「セントワークス」(大阪市)の竹沢光生さん(41)が、作業員3人と中心に入る。「故人のお世話をさせてもらう最後の人間としての礼儀」とマスクも手袋も着けない。部屋の整理・清掃と、特に要望があった「財布、通帳、印鑑、アルバム」の回収が、この日の作業だ。

男性は無職で一人暮らし。3LDKのリビングで病死していた。倒れていた場所は床が黒ずみ、テレビの前は漫画やたばこの吸い殻が散乱。台所や廊下はほこりが積もり、冷蔵庫には発泡酒が冷えていた。隣の和室に、整然と本が並ぶ書棚があった。「ここかな」。探ると、高校卒業時などのアルバム数冊があった。そばの書類ケースか

らは通帳、印鑑、それに十数枚の千円札が入った黒革の財布が見つかった。作業は続く。リサイクルに回すため、荷物は品目ごとに分類して梱包。家庭用洗剤や脱臭剤で、丹念に死の痕跡を消していく。

押し入れから、ボクシングの元世界王者の写真パネルや野球のクラブ、バットが出てきた。転職を繰り返した職歴や、趣味を「ボクシングと野球の試合鑑賞」と記した履歴書もあった。

大切な仕事さみしいけど...

引っ越し会社勤務の竹沢さんが遺品整理の需要を見越して会社を起こし、5年。

当初は月1、2件だった依頼も、今は10件を下らない。料金は、2トトラック1台

3時間の作業が終わった。空っぽの部屋からは、腐臭も、生活臭も消えていた。

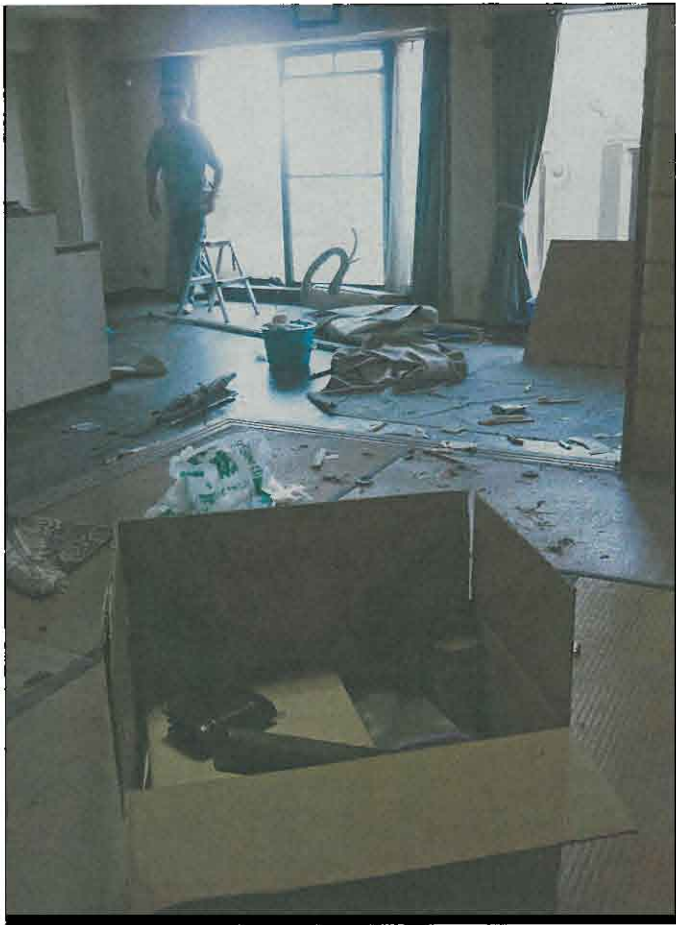
最近引きこもり気味。来客もなく、発泡酒を手に入、テレビのスポーツ中継を楽しんでいた。生前の故人について依頼主から聞くことはないが、数多い「現場経験」から、竹沢さんはそんな男性を思い描いた。だが、それが真実かわからない。親族は長年、男性と没交渉だったという。

分の荷物で12万円前後。専門業者は全国に10社ほどあり、副業として手がける清掃業者などを含むと約150の同業者がいるという。会社を始めた頃、風呂で孤独死した人の家で、痕跡が残る浴槽を洗ったことがある。「こんなことまで...」。当時は思ったが、場数を踏むうち、感情を抑えられるようになった。「大切な仕事」という自負がある。

7月のある日の作業は、入院中に病死した80歳代男性の遺品整理だった。築60年以上の長屋に独居。依頼主は遠方の親族だ。座布団2枚、扇風機5台...。大家族だったか、親戚が集う家だったか、大量の古い品々があふれていた。あちこちにシャツやズボンがつるさされ、壁には民生委員や新聞販売店の電話番号、「ガスの元栓を閉める」などの注意が記された貼り紙。「奥様に先立たれ、苦勞しはったようや。独りで生きてきた証しですな」。竹沢さんがつぶやいた。

結婚年齢の上昇②収入不安定による結婚難③配偶者を失った高齢者の長寿...を指摘。実数不明の孤独死もその延長線上で増えていると分析し、こう読み解く。

今の時代、縁薄い身内の死に、親類でもかかわり合いを避けるのは仕方ないと竹沢さんは思う。「だから、代わりに僕らがお手伝いさせてもらえればいいんじゃないか。さみしい話ですけどね」



独居世帯3割

2010年の国勢調査速報集計結果によると、独居を示す「単独世帯」は1588万5000世帯。核家族を意味する「夫婦と子供から成る世帯」(1458万8000世帯)を初めて上回り、一般世帯の31.2%を占めた。

立木茂雄・同志社大教授(家族社会学)は、独居世帯の増加の要因として、①

新ビジネス 個の時代補う

「日本は核家族の時代から『個』の時代に入った。冠婚葬祭や介護などの面でも、血縁を基盤とする従来のつながりが薄れており、遺品整理をはじめとする死後の後始末など、これまで家族が果たしてきた役割を担うビジネスが登場するのは、必然の結果だ」



80歳代男性の家には、多くのメモ書きが残されていた(7月、画像を一部修整しています)